

「鹿児島ダルク」の場所を報告する戸山代表

★ 居場所

見
な
録



「社会は冷たくなっているのかねえ」

薬物依存者の民間リハビリ施設「ダルク」を、1985年に日本で初めて開いた近藤恒夫さん(67)(東京)がふとこぼした。3月に鹿児島市に開設した「鹿児島ダルク」の記念フォーラムに訪れた際のことだ。

大麻事件で解雇された力士の例などを挙げ「一回で

も間違ったら排除する。最近、そういう傾向が強まっているよ

うな気がする。でも、何の解決にもならない」と痛った。薬物依存者が回復するための場所づくりに取り組んできた先駆者の率直な思いだったのだろうか。

ダルクでは、薬物依存に苦しむ人たちがグループミーティングや共同生活を通じて、地域の中での回復を目指す。回復した人

がスタッフとなって別の場で働き、全国に広まった。今では鹿児島を含め54施設ある。

だが、「スリッパ」と呼ばれる薬の再使用にも懸念となく直面する。鹿児島ダルク代表の戸山兼善さん(26)は「施設にいた利用者が、突然いなくなることも珍しくないんですよ」と明かす。が、「私も何度も死のうと思っただけれど、ダルクのおかげで壁の前に立てるようになった。同じ困難に悩む人たちの助けになりたい」と前向きだ。

フォーラムには、各地で施設を切り盛りしてきた先輩からも駆けつけ、「逆風は吹きます。でも、そんなの当たり前。根を下ろして頑張ってください」と、励ましのエールが相次いだ。

そんな温かい声を聞き、トラブルを抱えても迎え入れてくれる居場所があること自体が必要なのだと感じた。その言葉は薬物問題だけでなく、社会の様々な問題に直面する人たちへのメッセージでもあるだろう。人は決して冷たくはない。そう信じている。(北川洋平)

読売新聞 21.4.15 夕刊
(西部本社)